受験番号	番

得点	

〈問題五を除く〉

第1回　大阪府公立高等学校入試模擬　国語採点資料〔B問題〕

一

	1			2							3												4	
	㋐	㋑	㋒		傍観者的に人との心理的距離をおき、人を方向性と隔ての程度によって示そうとする傾向。						a	子供や動物が人に馴れ従う日本的な人の上下関係をもとにしたことを表す、					b	事物を対象とする場合や、繰り返すことによって慣らされること				古来の日本語をひもとく	
	隔て	把握	継続																					
	へだて	はあく	けいぞく																					
	40										35						30						11	

配点	1	1	1	5	5	5	3	21
注意事項				・「心理的な距離」「人を方向性で表す」の二つの点について書かれていること。 ・他の表現でも内容が同じであればよい。 ・部分点を与える。	・「子供や動物が人に馴れ従う」，「日本的な上下関係をもとにしている」の二つの点について書かれていること。 ・他の表現でも内容が同じであればよい。 ・部分点を与える。	・「事物も対象にすること」，「繰り返すことで慣らされること」の二つの点について書かれていること。 ・他の表現でも内容が同じであればよい。 ・部分点を与える。		

二

	1	2	3	4
	尋ね侍りしに	ア イ ウ エ	ア イ ウ エ	ア イ ウ エ

配点	3	3	3	3	12
注意事項					

三

	1				
2	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
ア イ ウ エ	納（オサ）める	危（アブ）ない	負（フ）傷（ショウ）	郵（ユウ）便（ビン）	宇（ウ）宙（チュウ）

配点	1	1	1	2	2	2	2	12
注意事項	採点に当たっては，「常用漢字表（付）字体についての解説」および「常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）」をふまえ，採点基準を定めること。							

四

	1	2	3											4					
	付与し	ア イ ウ エ	愚鈍な牛のような神経をもって、原稿用紙に、膨大な時間を入れ込んで対象物を深く見つめていく											a 自分の内側から意識する			b 外界との衝突	c テーマとの遭遇	
														10			6	7	
			45																

配点	3	4	6	4	4	4	25
注意事項			・他の表現でも内容が同じであればよい。 ・部分点を与える。	・他の表現でも内容が同じであればよい。 ・部分点を与える。			

五

資料から、②インターネットは世の中のできごとや動きをいち早く知る、役立つ情報を得るのに多く利用されているが、信頼できる情報を得るために利用しているのは、24・0％であり、テレビに比べ大きく数値が下回っていることがわかる。③インターネットは情報をすばやく手に入れることには非常に便利なメディアであるが、その信頼度はさほど高くないということである。確かにインターネット上では情報があふれており、個人の体験談など真実なのかどうかわからないことがある。よって、④私はインターネットというメディアでは、情報をそのまま全て受け入れるのではなく、一度立ち止まり、必要ならば他のメディアでも確認していくようにしたいと考える。

【作文の採点基準】

○指示された条件にしたがって、自分の考えが書かれていること。

○内容について(14点)

S…以下の①～③のポイントが三つとも十分にまとめられている場合　14点
A…以下の①～③のポイントのいずれか一つが不十分である場合　9点
B…以下の①～③のポイントのいずれか二つが不十分である場合　4点
C…以下の①～③のポイントがどれも満たされていない場合　0点

①主旨・要旨について

・「『インターネット』というメディアに対してどのように接していけばよい」かという話題について自分の意見が明確に書かれている。

②根拠・例示について

・表から分析できることを具体的にあげることができている。
・例示を根拠として示すことができている。

③全体の構成について

・主題と、それに対する自分の意見を書くために適切な例示や根拠が使われている。
・例示や根拠を通じて、主題に対する結論として、自分の意見が明確にまとめられている。

○表記について(6点)

以下の①～④の各項目について誤りがあれば、一項目につき、減点1点とする。
(それぞれ一箇所につき減点1点とするが、同一の誤りは一箇所とみなす。たとえば、異なる漢字を複数誤っている場合は1点ずつ減点とし、同じ漢字を複数回間違えているものは減点1点とする。)

①原稿用紙の使い方に誤りがある。
②誤字や脱字があり、漢字が適切に用いられていない。
③語句の用法が適切でない。
④文の成分の順序や照応が適切でない。

【解説】

一

1　㋐「隔てる」とは「距離を置く」という意味。「隔て」はここでは「距離」を表す。
㋑「把握」とはここでは「しっかり理解すること」という意味。
㋒「継続」とは「途切れずに続くこと」という意味。

2　――線①を含む段落に着目すると、「人を方向性でとらえることは、結果として……」とあるので、まず「人を方向性でとらえること」がポイントであるとわかる。次に、「傍観者的」を探すと、文章冒頭に「『人』一般を……心理的距離をおき、傍観者的な立場でとらえようとする日本語」とある。これらをつなげてまとめるとよい。

3　「なつく」「なじむ」ということばを説明している場所を探す。――線②の二行後に「『なつく』は……日本的な人の上下関係が下敷きとなっている」とある。[a]はここをまとめればよい。また、その直後に「『なじむ』のほうは……事物が対象であってもかまわない」と「なつく」との違いについて述べ、さらに「繰り返すことによって慣らされていくのも『なじみ』である」とあるので、[b]はこれらをまとめればよい。

4　本文中では、「習う」ということばについても述べている。その中で、「もともと『習う』は古くは『習ふ』で……」という説明や、「ならひて」ということばを含む「『源氏物語』桐壺の巻」の一節を紹介している。これらを通して「習う」が「内なる己が……順応し、身についていく」ことであると示している。そして本文の最後で、「『習う』のような……行為も、古来の日本語をひもとくことによって、……行為であることが理解できる」とまとめている。つまり筆者は本文中で、「『習う』という行為」について、「古来の日本語をひもとく」ことでその性質を明らかにしたのである。

二

1　「尋ぬ」の意味は現代語と古文とで大きく変わらない。「探す・調べる・質問する・訪れる」などの意味がある。また、文脈からも一～二行目の「尋ね侍りしに」が、定家卿が父に歌の詠み方を質問したことを指していることがわかる。

2　直前に「今も思い合はせられ侍りて」とあることから、親の教えに対して「ありがたき」と書いた定家卿はその教えが尊いものだと思っていると読み取れる。

3　「浅深」とは、つまり「浅い」「深い」があるということなので、「心ざし」(歌を詠むときの心の働き)には度合いの違いがあると読み取れる。また、あとで「初心」「後心」についてそれぞれ述べていることから、熟練度によって違いがあることを述べているのだと読み取れる。

4　筆者は本文中で、定家卿の書いた文章を紹介し、「心ざしの及ぶ所にかなはんとすべし」という内容を受けて、「初心」「後心」でそれぞれどのように詠むべきかという内容を補足している。定家卿の書いた内容をもとにしているので、その中で「……とすべし」と述べられていることを筆者もすすめているのだと読み取れる。

三

1　(1)　同訓異字の「収」「治」「修」と間違えないよう注意する。
(2)　「危」の他の訓読みは「あや(うい)」「あや(ぶむ)」。
(3)　「傷」の訓読みは「きず」「いた(む)」「いた(める)」。「傷」のつくりは「場」のつくりとは形が異なることに注意する。
(4)　「郵」を使った熟語には「郵送」などもある。
(5)　「宇」の「うかんむり」の下を「子」にしたり、「宙」の「うかんむり」の下を「田」にしたりしないよう注意する。

2　「話の腰を折る」とは、口を挟んで、相手の話を途中で遮ること。

四

1　「書くことは」という主部に、事物に新しい価値を「付与し」と新しい関係を結ぶ「ことである」という二つの並立する述部が対応している。「事物に新しい価値を付与し」で一つのまとまりになっており、修飾語の「事物に」は、このまとまりの中の「付与し」について、「何に」付与するのかをくわしく説明している。

2　アは、「不意に、『私がいる』ことに驚いた」というのは自分以外の視点から自分を見たということではなく、自分自身について新たな発見をしたということなので、合わない。イは、「恐ろしい直観」とは、「私がいる」ということに対するものであり、その「直観」が「素早く身につきささった」ことを述べているので、「蠅が天井から落ちてきて体に素早くつきささった」という部分が合わない。ウは、「直観」において存在を感じた「私」とは、「様様な経歴や記憶、嗜好の衣をはおっている」自分自身ではなく、「すべての衣をはぎとった丸裸の私」のことであるという内容に合う。エは、「すべての衣をはぎとった丸裸の私」とはたとえの表現であり、筆者が実際に「眠っている間に衣服をすべて脱いでいた」わけではないので、合わない。

3　筆者は「書くという作業」について、「原稿用紙たった三枚にも、膨大な時間を入れ込むことができ、対象物を深く見つめていくことが必要とされる」と述べている。また、「対象物を深く見つめていくこと」について、「『みずみずしい感性』など」でなく、むしろ愚鈍な牛のような神経が必要だ」とも述べている。

4　「自己の発見」のことを、筆者は「『私』を意識する」ということばでも言い表している。[a]のあとにある「不可能」という内容は、「自分の内側から『私』を意識することなどできるのか」と、「できるのか」を反語的に用いて述べている部分に対応している。また、そのあとの「外界との衝突なしには、私を認識することはできない」という内容は、裏を返せば「外界との衝突」が「私を認識すること」につながるのだといえる。これが[b]で「必要」だとまとめている内容である。[c]は、直前に「文章を書くことでいえば」とあるので、自己の発見と「文章を書くこと」を関連付けて述べている部分に着目する。「文を書くという作業……」と始まる段落で、「同じような仕組み」として、「あれを書いてみようかなと思う、テーマとの遭遇」を取り上げている。これが、「文を書くという作業」における「外界との衝突」にあたる。

五

この作文の中心となるのは、「『インターネット』というメディアに対してどのように接していけばよいと考え」るかという内容である。この内容を導くために、まず、条件にしたがって表から分析したことを書き進める必要がある。「インターネット」との数値の差が顕著に出ているメディアに注目すると分析しやすい。分析した内容から考えたことを根拠とし、自分の意見につなげるとよい。

【二　古文の現代語訳】

定家卿の書いたものに、「歌はどのように詠むべきでしょうかと尋ねましたところ、『心の働きに合わせようとするのがよい』と言われたことが、今もふと思い至りまして、尊い親の教えである」とお書きになっている。心の働きには浅い深いがあるようだ。初心者のうちは、初心者の心の働きに合わせようとするように、実直に詠むのがよい。熟練者は、どんなに才能に任せて詠んでも、心の働きに合うに違いない。